

河内木綿の節句幟

李 熙連伊 (い ひよんい)

節句幟について

節句幟の原型は、戦場で敵味方を識別するために使われた旗指物であると言われている。旗指物は武士の背中に指す旗という意味で、敵か味方かを判別するだけでなく、どこの武家の者が武勲を立てたかを明確にするためにも、各武家はそれぞれの家紋や独特の図柄の旗指物を使った。

現在、端午の節句飾りといえば、鯉幟が主流であるが、鯉幟が登場したのは幕末で、江戸時代は絵幟が盛んであった。絵幟は、絵が描かれた幟で節句幟そのものである。勇壮な武者や鐘馗、金太郎等を、手描きや筒描き、あるいは木版で、絵師が描いたものである。

江戸時代初期に端午の節句飾りとして、武家の間で始まったものが、次第に町人たちもそれに習って、絵



名所江戸百景 水道橋駿河台
歌川広重 安政四年 (1857)

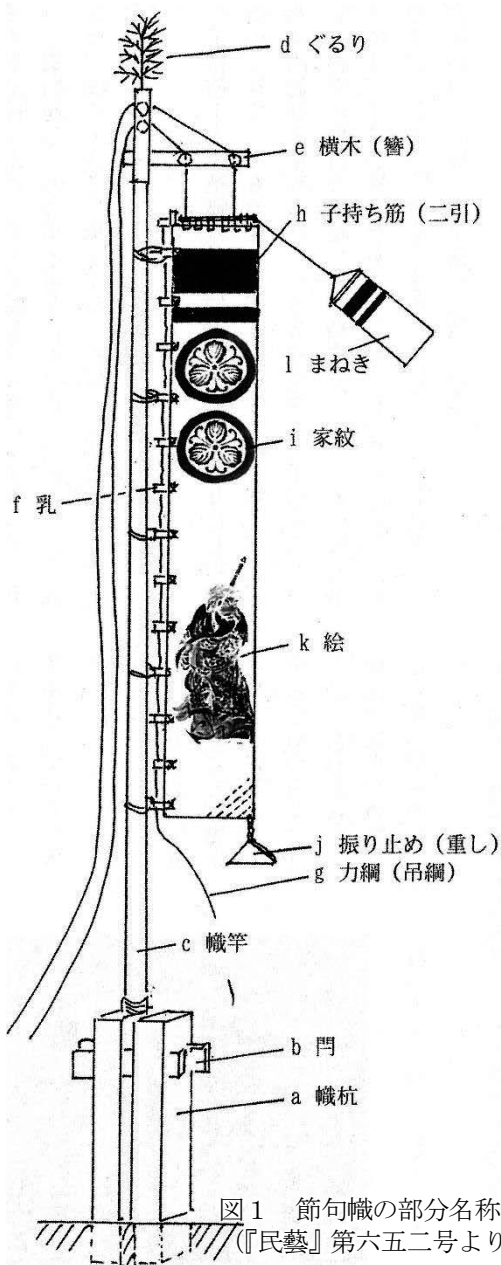


図1 節句幟の部分名称
『民藝』第六五二号より

幟を立て、子供の健やかな成長と出世を祝い願うようになったという。今でも、福島、栃木、山梨、岐阜、四国、九州などでその風習が残っている。

鯉幟との関係については、江戸時代中期に大型の幟の上部に小旗(磨・まねき)の代わりとして、小さな鯉の形状をしたものをつけた人がいた。これが流行し、現在の鯉幟になった。明治時代半ば頃までは、和紙製で黒い鯉一匹であったが、時代とともに次第に増え、現在のようになつたという。

次に、節句幟の部分名称とそこに込められた思いについてみてみよう。

d...ぐるり

神・松等を挿す。神を招く依代。神への目印。

「初節句には、最上部の枝葉を残した杉を幟の竿にし、翌年からは、枝葉を切つて矢車をつけた。」(河内長野市内の事例)

h...子持ち筋(二引)

上の太い黒線は父を、下の細い黒線は母を表す。

i...家紋(二つ)あるいは(一つ)

二つの場合は、上が贈られた子供の家紋で、下が贈り主の家紋。
一つの場合は、贈られた子供の家紋。

k...絵

子供に対する願いが込められている。
神話の主人公であるスサノオや神功皇后をはじめ、為朝や義経と弁慶といった源平時代の武将

秀吉や加藤清正ら戦国の世の武将たちは、江戸時代にはその武運が崇められてよく描かれた。

f: 振り止め(重し)

風に吹かれても、幟がキリッと張るようにするための重り。疱瘡除けの赤い三角形の布を縫い付ける。赤い三角形の袋に靱殻や綿を詰めたものや、赤い猿や三番叟の人形をつけたものもある。

f: 乳(「ち」もしくは「ちち」)

陰陽道の魔除けの印「星印(セーマン)」「九字(ドーマン)」「叶(かなう)」の文字で縫い付けられている。

ある地方では、出来上がった幟を広げ、その脇に親類縁者の女性が並び、自分の前の「乳」を、手縫いして子供の将来の安泰を祈った。

記録にみる河内の節句幟

かつて河内でも絵幟があったことを物語る古文書が市内に残る。河内国若江郡東郷村萱村家文書『八尾市史料編』の「天保七申年十一月 当申凶作米穀高直二付儉約仕方帳 河州若江郡 東郷村」には、「一、五月五日 幟始祝義取遣不致、并町内懇意たり共相招候義無用」とあり、初節句に幟を立て、町内の人を招いて祝い事をするのを禁じている。

また、年末詳だが、河内国若江郡今井村松井家文書(八尾市立歴史民俗資料館蔵)には、「初節句のぼり之朔日一日ニ可致候」とあり、五月一日の一日間だけ幟を揚げることを許している。

また、享和元年(一八〇一)に刊行された『河内名

所図会』の「八尾市(やおのいち)」でも幟が登場する。これは、市内本町にある常光寺の本尊である地藏菩薩の縁日の時の門前の賑わいを描いたものである。そのなかで、幟が雑貨商の庇として使われている。このように、江戸時代、八尾地域で幟を揚げることは一般的であったことがわかる。今日残された節句幟は、そういった風習が昭和の初めまで続いていたことを物語っている。



『河内名所図会』八尾市(やおのいち) 享和元年(1801) 右頁中央屋根の庇

大阪商業大学商業史博物館所蔵の節句幟について

これまで筆者が調査した河内の節句幟は、十四旗である(表1参照)。ここでは、大阪商業大学商業史博物館に所蔵されている二旗の節句幟について紹介する。これらの節句幟は、いずれも東大阪市御厨村の庄屋を務めた加藤家から寄贈されたものである。

豊臣秀吉節句幟(丸に武田菱紋・下がり加藤藤紋入)

【素材・制作技法】木綿製・筒描きと顔料による彩色

【法量】長さ一〇〇四・〇cm×幅九九・〇cm

【一cm間の糸の密度】経一六本×緯一二本、手紡ぎ糸

【乳の刺繍】上辺左端の乳「叶(かなう)」

上辺右辺の交差部の乳「九字(ドーマン)」

【乳の数】上辺に六個・右辺に二個

【振り止め】三角形に布が縫い付けられていた痕跡あり。左下に乳状の赤い毛氈が二ヶ所残る。

【署名】山月

【落款】朱文方印「金山」

馬上の武将と一人の家臣、そして馬印持ちが一人描かれている。馬印の千成瓢箪から、馬上の人物は豊臣秀吉であることがわかる。秀吉は、右手で三面大黒天を、左手には黒塗りで表に日輪を描いた軍扇を持っている。三面大黒天とは、大黒天、毘沙門天、弁財天が三位一体となった福の神で、秀吉は、念持仏として生涯これを所持したというエピソードがある。

河内でも人気であった「太閤さん」にあやかって、立派な人になって欲しいと願う親の思いが込められた節句幟である。

家紋が二つ染められているが、加藤家の紋である下がり加藤藤紋が下にあるため、加藤家が贈った節句幟であることがわかる。本来であれば、加藤家から嫁い

だ女性が産んだ子供に対して贈った節句幟であるため、加藤家には残らないはずであるが詳細はわからない。

加藤清正節句幟（下がり加藤藤紋・丸に武田菱紋入）

【素材・制作技法】木綿製・筒描きと顔料による彩色

【法量】長さ九四六・〇cm×幅九七・五cm

【1cm間の糸の密度】経一二本×緯一二本、手紡ぎ糸

【乳の刺繍】上辺左端の乳「九字（ドーマン）」

上辺右辺の交差部の乳「叶（かなう）」

右辺右下の乳「星印（セーマン）」

【乳の数】上辺に五個・右辺に三三個

【振り止め】三角形に黒いビロードが縫い付けられて

いた痕跡あり。一部黒いビロードが残る。

【署名】無し

【落款】無し

馬上の武将の甲冑の家紋が蛇の目紋であることから、この人物は加藤清正である。馬印には加藤の「加」の文字が見える。清正と共に二人の家臣が描かれており、

清正の近くにいる家臣は、清正と同じ方向を仰ぎ見て

いる。もう一方の家臣は槍を持ち腰を屈めて、何かを知らせている人物の話の話を聞いている。この人物は清正と家臣が仰ぎ見ている方向を指さしている。

この節句幟にも家紋が二つ染められている。丸に武田菱紋と下がり加藤藤紋である。加藤家の紋である下がり加藤藤紋が上にあるため、この節句幟は加藤家に誕生した子供に対して贈られたものであり、今日まで加藤家に伝わったものと考えられる。

しかし、まだ疑問も残る。二つの下がり加藤藤紋をよく見比べていただきたい。デザインが少し違っている点にお気づきだろうか。この違いは、時代によって加藤家の紋が変化したものなのか。それとも本家と分家で家紋を少し変えることがあるので、これがそれにあたるものなのか。あるいは、注文を受けた紺屋のセンスでアレンジしたものなのだろうか。

いずれにしても、二枚の節句幟に染められている二つの家紋から、両家の結び付きの深さを感じ取ること

ができる。

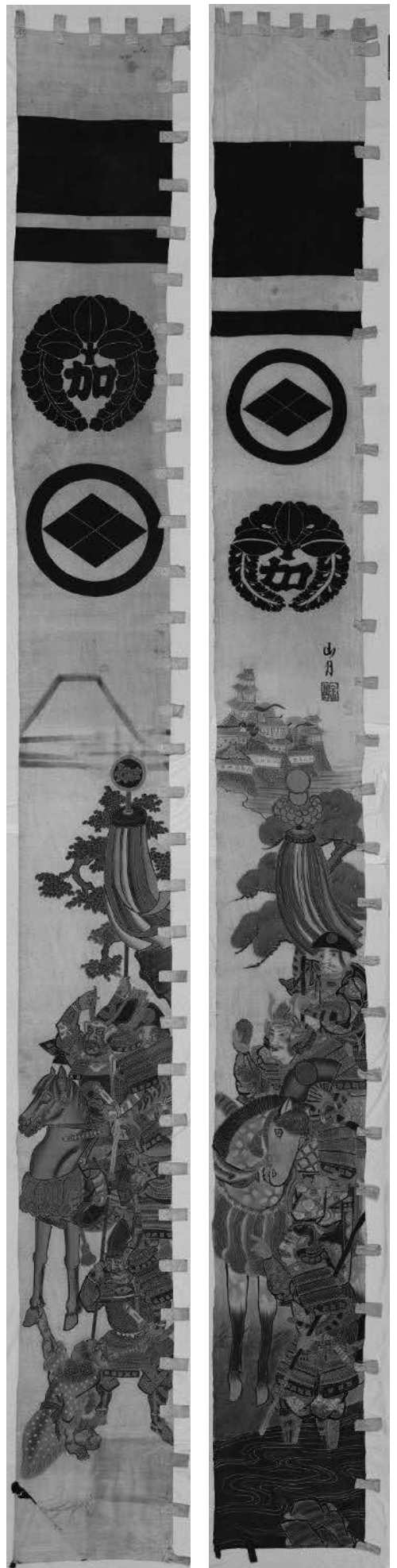
節句幟の作者について

節句幟は、浮世絵師、町絵師、腕の達つ染師などが描いた。江戸期の多くの幟には、署名・落款のあるものは、ごく一部である。

また、武者絵Ⅱ節句幟と思われるが、江戸期の絵柄は全く多種多様であった。明治末期から省力化が進み、型染化されるようになると、絵柄は人気のある武者絵とか鯉の滝登りなどに限定化された。今見る節句幟が、ほとんど明治末期以降のものである。節句幟Ⅱ武者絵という概念が定着した。

今回、大阪商業大学商業史博物館のご厚意で調査させていただき、河内における節句幟の類例に二例加えることができた。

しかし、作者や落款などについては言及出来ない。今後さらに一例でも多く類例を集め、河内木綿の節句幟について少しでも明らかにしていきたい。



本稿は、二〇二〇年二月十四日に大阪商業大学ユニバーシティホール蒼天で行なわれた、令和元年度大阪河内学公開講座での講演内容を基にまとめたものである。本稿中の幟についての詳細な研究は、江戸時代の幟旗の収集家である北村勝史氏の研究による。

謝辞

本稿を作成するにあたって、大阪商業大学商業史博物館の方々をはじめ、多くの方々にお世話になりました。

心よりお礼を申し上げます。

(八尾市立歴史民俗資料館学芸員)

表1 筆者がこれまで調査した河内の節句幟

	画題	法量 (長さ×幅) cm	所蔵者
①	加藤清正	640.0×64.6	当館・辻合喜代太郎氏収集染織資料
②	豊臣秀吉	500.0×45.5	〃
③	〃	909.0×98.0	東大阪市立郷土博物館
④	〃	866.2×86.0	八尾市内個人
⑤	趙雲と阿斗	932.0×93.5	安中新田会所跡旧植田家住宅
⑥	黄石公と張良	757.5×61.5	〃
⑦	スサノオとヤマタノオロチ	945.0×96.0	〃
⑧	三本松	1008.0×98.6	八尾市内個人
⑨	福・禄・寿 (三旒一対)	394.0×41.3 389.2×41.4 396.0×41.2	〃
⑩	賤ヶ岳七本槍	990.0×125.6	門真市立歴史資料館
⑪	源頼義岩清水	904.0×98.0	門真市内個人
⑫	黄石公と張良	848.0×100.0	〃
⑬	豊臣秀吉	1004.0×99.0	大阪商業大学商業史博物館 (御厨村庄屋)
⑭	加藤清正	946.0×97.5	〃